



【シラバスアワードへの想い】

代表理事 川廷 宗之



●職業教育への問題意識

「職業教育」の重要性が叫ばれて久しいが、日本において十分に理解され、正しい教育が行われているだろうか。高等教育機関の卒業生の多くは企業等に就職し、実務に携わる。「仕事ができる」人材が求められている一方、教育機関側はそのリクエストに応えているだろうか。

そもそも「仕事ができる」人とはどんな人か。当機構では「状況を変化させることができる人」「自分自身の生活を変えることができる人」と定義する。自らの置かれた状況を客観的に把握し、問題解決に向けて自らの行動を起こし、あるべき姿に組織変革を促すことができる人である。

どうしたら「仕事ができる」人を育成できるのか。座学による知識の詰め込みだけでは実現できない。「実践」を伴う学修を積み重ねることによってこそ、身に付けることができる。経験によって人は成長することができるのである。

昔の子供たちは地域の仲間たちと野原を駆けずり回りながら遊んでいた。様々な年齢、様々な境遇で生きて来た子供たちが一同に会していた。子供たちは、普段の遊びの中で「人間関係」を実践的に学ぶと共に、遊びのルールを自ら作って行く体験をしていたのである。楽しいだけではなく、理不尽な経験にも直面しながら、コミュニケーションの力を磨いていたのではないだろうか。

●職業教育の高度化に向けて

時代が変化する中で、高等教育機関の置かれている状況は大きく変化している。教員と学生の関係も変化している。教員は学修内容を予め明示し、その内容が着実に実施されているか評価を受けることが常識化している。学修内容を表現するツールが「シラバス」である。座学だけではなく「実践」を伴う教育が求められる「職業教育」においては、「シラバス」の重要性はますます高まっている。

なぜなら、座学と比較し、「実践」を伴う教育を実現するには、様々な準備が必要になる。

アクティブ・ラーニングを行うにしても、そのための段取りは多岐に渡る。教員にとっても、学生にとっても綿密な準備が必要であり、その準備を着実に行うための道標が「シラバス」である。

●シラバスアワードの目的

「実践」を伴う「職業教育」の実現に当たって重要な「シラバス」に多くの教員に目を向けて欲しいと思っている。「シラバス」を学校から求められる面倒な作業と捉えるのではなく、その本質を理解し、積極的に活用して欲しい。「シラバス」を磨く過程を通して、「職業教育」の教育力の向上が図れることを認識して欲しい。

また、「シラバス」が高等教育機関の魅力作りに大きく貢献する観点も指摘したい。学修内容が見える化したものが「シラバス」であり、学校の「商品」である教育の中身を世に紹介するツールである。良き「シラバス」が学校の魅力を発信し、募集活動にプラスのインパクトを与える可能性があることを、学校経営者に理解して欲しい。

「シラバス」への積極的な取り組みを行う輪が広がることによって、「職業教育」の充実化に繋がることを願って止まない。こうした流れに、当アワードが貢献できればと考えている。

一般社団法人職業教育研究開発推進機構 代表理事 川廷宗之

<代表理事 略歴>

川廷 宗之（わかてい もとゆき）

地方公務員、松本短期大学 教授、東海大学 健康科学部 教授、大妻女子大学 人間関係学部 教授などを経て、

2016 年 4 月から大妻女子大学 名誉教授、

一般社団法人職業教育研究開発推進機構 代表理事

学校法人敬心学園職業教育研究開発センター 学術顧問（初代センター長）

【主要著書】

「社会福祉教授法（1997 年、単著）」川島書店

「専門職大学の課題と展望（2019 年、編著）」ヘルス・システム研究所

「アクティブ・ラーニングで学ぶ介護過程ワークブック（2016 年、編著）」みらい 他多数